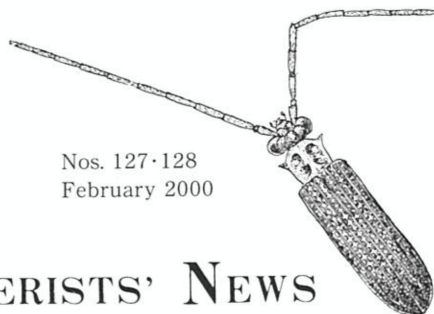




Nos. 127-128
February 2000

甲虫ニュース

COLEOPTERISTS' NEWS

沖縄島のオビハナノミ属甲虫

高桑正敏・杉本可能・焼田理一郎

沖縄県沖縄島からは、これまでに6種のハナノミ科オビハナノミ属甲虫が知られてきた(高桑, 1985; 東・金城, 1987; TAKAKUWA, 1999; など)。しかし、かつて琉球大学学生であった筆者らの1人杉本(旧姓出口)、現在も沖縄島在住の同じく筆者らの1人焼田によって同島から未記録だった種もいくつか発見されている。ここにそれらを報告するとともに、筆者らの1人高桑の手元にある標本も併せ、沖縄島産の本属について記録をまとめておくことにする。データが示された標本のうち、杉本採集の分は杉本が、焼田採集の分は高桑採集のものとともに基本的には高桑が保管している。

本文に先立ち、高桑に貴重な標本を委ねられた福井県の斉藤昌弘氏と九州大学農学部の上野輝久氏に厚くお礼を申し上げる。

イリエオビハナノミ *Glipa (Macroglipta) iriei* TAKAKUWA

文献: 高桑, 1976 (*G. sp.* として); TAKAKUWA, 1977; 高桑, 1985; 東・金城, 1987。

1♀, 国頭村与那覇岳, 26. VI. 1978, 杉本採集。

沖縄島以外では八重山諸島と台湾、中国海南島、北ベトナムから記録がある。沖縄島産は2♀しか検していないが、基準産地である八重山諸島産や台湾産と比べ、鞘翅端前の白帯はより前方に位置し、また前胸背板の黒色部はより明瞭かつ大きいことで区別できる(図1)。与那覇岳での個体はノムラオビハナノミやハリオオビハナノミとともに、伐採

地の斜面に1本だけ残されたタブノキの周辺に吹き上げられてきては下草などに静止したものである。

ワモンオビハナノミ *Glipa (Macroglipta) apicalis* Pic

国頭村与那: 1♂, 23. VI. 1996, 焼田採集; 6♂2♀, 28-29. VI. 1997, 焼田採集; 2♂, 10. V. 1998, 焼田採集; 4♂1♀, 24. V. 1998, 焼田採集; 4♂, 31. V. 1998, 焼田採集; 3♂, 7. VI. 1998, 焼田採集。

日本産は *G. shibatai* NAKANE の名が与えられてきたが, HORÁK (1994) はそれを標記(基準産地: ラオス)のシノニムとした。この扱いは妥当であろう。福井県以西の本州と琉球列島、台湾、中国南部、インドシナに知られる。与那ではハリオオビハナノミと同所でも見られたが、本種の方が明るく開けた環境を好む。また、地表近くの低い草本に飛来することも多い。

クサマオビハナノミ *Glipa (Macroglipta) kusamai* TAKAKUWA

文献: TAKAKUWA, 1999。

1♂1♀, 国頭村奥, 30. IV. 1979, 杉本採集。

1999年に記載されたばかりで、沖縄島のみから知られる。奥での個体はウエノオビハナノミと

ともに、スダジイを主とする二次の天然林を切り開いて作られた畑地林縁の1本の灌木葉上に次々と飛来してきたもの。



図1. 沖縄島産イリエオビハナノミ *Glipa (Macroglipta) iriei* TAKAKUWA, ♀, from Okinawa Is.

コオビハナノミ *Glipa (Macroglipa) fasciata* Kô-no

文献: CHÛJÔ, 1959; NOMURA, 1966; 高桑, 1985; 東・金城, 1987.

1♂1♀, 国頭村西銘岳, 18. VI. 1981, 杉本採集; 国頭村与那: 1♂1♀, 15. VI. 1990, 上野採集; 6♂, 16. VI. 1990, 上野採集; 1♂, 23. VI. 1996, 焼田採集; 1♂, 24-27. V. 1997, 高桑採集; 1♀, 28-29. VI. 1997, 焼田採集; 2♂, 10. V. 1998, 焼田採集; 2♂, 24. V. 1998, 焼田採集; 1♀, 21. VI. 1998, 焼田採集.

四国・九州から台湾, 中国にかけて記録がある. 沖縄島産は背面の黄紋が多少とも発達する傾向が強い. 西銘岳で採集した個体は, 他のハナノミ類とともに, 伐採地内に筋状に切り残された防風林内の灌木葉上に並ぶように静止していたもので, わずか幅1-2mの範囲であった.

ウエノオビハナノミ *Glipa (Macroglipa) uenoi* TAKAKUWA

1♂1♀, 国頭村奥, 30. IV. 1979, 杉本採集; 3♂1♀, 国頭村辺野喜, 31. V. 1998, 焼田採集; 国頭村与那: 2♂, 2. V. 1990, 齊藤採集; 1♂2♀, 24-27. V. 1997, 高桑採集.

基準産地は奄美大島で, 他に中国から記録されている. ただし, 中国産は FAN & YANG (1993) の示した交尾器の図を見る限り, 別の種である可能性が高い. 辺野喜では林縁から少し中に入ったクワズイモ葉上で得たが, 与那における次種らが飛来した場所に比べると, かなり暗く閉鎖的な環境であった.

サトウオビハナノミ *Glipa (Macroglipa) satoi* yanma TAKAKUWA

文献: CHÛJÔ, 1959; NOMURA, 1966; 高桑, 1977; 高桑, 1985; 東・金城, 1987.

国頭村与那: 1♂, 15. VI. 1990, 上野採集; 8♂, 24-27. V. 1997, 高桑採集; 1♀, 15. VI. 1997, 焼田採集; 3♂1♀, 10. V. 1998, 焼田採集; 12♂2♀, 24. V. 1998, 焼田採集; 4♂4♀, 31. V. 1998, 焼田採集; 2♂, 7. VI. 1998, 焼田採集; 1♀, 国頭村与那覇岳, 26. VI. 1996, 焼田採集.

基準亜種は台湾のほか中国から, また本亜種は奄美大島と沖縄島のみから知られる. 与那における高桑と焼田の採集品のほとんどは, 前・次種とともに, リュウキュウマツの植林地が混合する照葉樹林の林縁の1カ所の葉上から得たものである.

タイワンオビハナノミ *Glipa (Macroglipa) formosana* PIC

国頭村西銘岳: 1♀, 22. VI. 1982, 杉本採集; 1♂, 26. VI. 1982, 杉本採集; 国頭村与那: 1♀, 24-27. V. 1997, 高桑採集; 2♀, 28-29. VI. 1997, 焼田採集.

前2種とともに日本で1つのグループを形成するが, いずれも日本では奄美大島と沖縄島のみ分布することは実に興味深い. 台湾のほか中国南部からも記録されているが, 後者の記録 (FAN & YANG, 1993) は図示された交尾器を見る限りでは, 本グ

ループとは別の種である.

ノムラオビハナノミ *Glipa (Stenoglipa) nipponica* NOMURA

文献: NOMURA, 1957; NOMURA, 1966 (以上 *G. malaccana nipponica* として); 高桑, 1985; 東・金城, 1987.

国頭村西銘岳: 1♂, 18. VI. 1981, 杉本採集; 1♂, 20. VI. 1981, 杉本採集; 国頭村与那: 2♂, 24. V. 1998, 焼田採集; 3♂, 24. V. 1998, 焼田採集; 1♂1♀, 7. VI. 1998, 焼田採集; 2♂, 21. VI. 1998, 焼田採集; 1♂, 国頭村与那覇岳, 26. VI. 1978, 杉本採集; 1♂2♀, 今帰仁村乙羽岳, 10. VI. 1980, 杉本採集.

沖縄島が本種の基準産地で, 他に奄美大島, 熊毛諸島, 五島列島から知られるほか, 中国海南島からも記録されている. 与那では次種とほぼ同所で見られたが, 本種の方が湿潤な環境 (近くに沢が流れており, リュウキュウリモンテンボが見られるようなところ) を好むようである. また, 乙羽岳では地上約1mで折れた直径約30cmほどの樹種不明の株に飛来してきた.

ハリオオビハナノミ *Glipa (Stenoglipa) annulata* (REDTENBACHEL)

文献: 高桑, 1985; 東・金城, 1987.

国頭村辺野喜: 2♂1♀, 31. V. 1998, 焼田採集; 7♂5♀, 7. VI. 1998, 焼田採集; 国頭村与那: 2♂1♀, 24. V. 1998, 焼田採集; 3♂, 31. V. 1998, 焼田採集; 3♂2♀, 7. VI. 1998, 焼田採集; 1♀, 21. VI. 1998, 焼田採集; 国頭村与那覇岳: 1♀, 24. VI. 1979, 杉本採集; 13♂2♀, 31. V. 1998, 焼田採集; 1♂, 今帰仁村呉我山, 10. VI. 1980, 杉本採集.

従来は *G. malaccana* PIC とされてきたが, HORÁK (1994) はそれを標記 (基準産地: ニコバル島) のシノニムとした. ここではそれに従っておくが, 筆者らの1人高桑は別の見解をもっている (近く発表の予定).

以上オビハナノミ属は9種が記録されたが, これは日本の1地域としては奄美大島あるいは屋久島の9種と並び, 最も種数が多い. しかし, 分布が予想される種には, なおザウテルオビハナノミ (奄美大島や石垣島などに分布) やクサカベオビハナノミ (奄美大島に分布), オオシマオビハナノミ (奄美大島や台湾などに分布) などがあり, 今後の発見を期待したい. 地理的に見た場合には, ファウナ的に奄美諸島あるいは八重山諸島と関連が深いと予想されるが, 前者との共通種が7種であるのに対し, 後者のそれはわずか2種にすぎず, より離れた台湾の6種と比べても著しく共通性が低い点は大変に興味深い.

引用文献

東 清二・金城政勝, 1987. 沖縄産昆虫目録. ix+i+422 pp. 沖縄生物学会.

- CHŪJŌ, M., 1959. Coleoptera of the Loo-Choo Archipelago (I). *Mem. Fac. lib. Arts Educ. Kagawa Univ.*, part, 2, (69): 8-15.
- FAN, X. & C.-K. YANG, 1993. Revision of the genus *Glipa* of China (Coleoptera: Mordellidae). *Mem. Beijing nat. Hist. Mus.*, (53): 45-68. (In Chinese with English description.)
- HORÁK, J., 1994. Description of *Glipa* (*Macroglipa*) *thoracica* sp. n. and revision of some species of the genus *Glipa* Leconte from the Oriental region (Coleoptera, Mordellidae). *Folia Heyrovskyana*, 2: 101-110.
- NOMURA, S., 1957. Mordellid- and elmids-beetles of Yakushima (Coleoptera). *Ent. Rev. Japan*, 8: 40-44.
- NOMURA, S., 1966. Mordellid-fauna on the Loocho Islands, with descriptions of some new forms. *Ent. Rev. Japan*, 18: 41-53.
- 高桑正敏, 1976. 八重山諸島のハナノミ族リスト. *Elytra*,

Tokyo, 3: 15-18.

- TAKAKUWA, M., 1977. A new species of the genus *Glipa* LeConte from the Ryukyu Islands (Mordellidae). *Elytra*, Tokyo, 5: 9-11.

高桑正敏, 1977. 屋久島のサトウオビハナノミの記録訂正およびその近縁種の存在について. 甲虫ニュース, (39): 5.

高桑正敏, 1985. ハナノミ科ハナノミ族. 黒沢良彦ほか編, 原色日本甲虫図鑑, 3: 376-386. 保育社, 大阪.

- TAKAKUWA, M., 1999. A new mordellid species allied to *Glipa oshimana* (Coleoptera, Mordellidae) from the Ryukyu Islands. *Elytra*, Tokyo, 27: 65-69.

(高桑: 神奈川県立博物館 (自然))

(杉本: 静岡県焼津市)

(焼田: 沖縄県那覇市)

○セアカホソクチゾウムシの晩秋における知見

セアカホソクチゾウムシ *Apion sulcirostre* SHARP は, *Protapion* 亜属に属する体長 1.8~2.5 mm の小甲虫であり, 北海道, 本州に分布する。近縁のヒゲナガホソクチゾウムシ *A. placidum* FAUST は, フジの蕾を加害し, *Apion* 属の他種も, フジなどのマメ科植物, 広葉樹, 双子葉草本類が寄主植物として知られている。

このたび筆者は, 本種を針葉樹のモミより, 以下のとおり多数採集したので報告する。

28 頭, 静岡県御殿場市, 富士山麓岩近く (北緯 35°19'65'', 東経 138°46'49''), 25. X. 1998; 42 頭, 同地点, 1. XI. 1998, 筆者採集・保管。

採集地点は富士山南斜面の海拔 1,300 m に位置し, ミズナラの優占林が広がる中にモミやニワトコなどが点在する。採集時点ではミズナラはすべて落葉し, 下草もほとんど枯れていたため, 地表まで遮るものがなく陽光に照らされていた。本種の多くは, 胸高直径 30~40 cm のモミの地上高 50~100 cm の水平に張りだした枝 (写真 1) から採集された。また, 葉の残っているニワトコなどからも, 1 本の樹木あたり 1~2 頭と少ないながら得られた。



多くの個体が得られた枝の葉に食痕はみられず, 生葉のついた枝とともに 3 週間ほど飼育したが, やはり葉に食痕はみられなかった。

採集地では, 枝先の下面と葉の基部との間に口吻をさし込み, 静止している個体が多くみられた (写真 2)。



ここが越冬場所ではないようで, 同年 11 月 28 日に同地を訪れ採集を試みたが, 1~2 頭採集できたのみであった。

なお, 本種と同時にサキブトホソクチゾウムシ *A. pachyrrhynchum* GEMMINGER を 1 頭得ている。

末筆ながら, 同定の労を快諾いただき, 今後の生態調査について御示唆を賜った森本 桂博士, 多くの御教示をいただいた沢田佳久博士に厚くお礼申し上げます。

参考文献

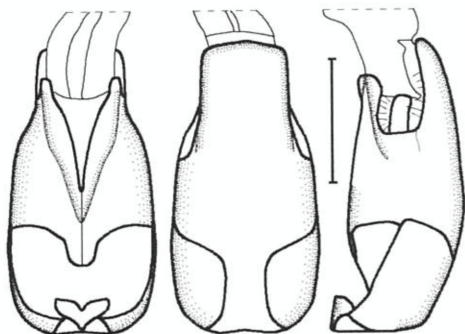
- 森本 桂, 1984. ホソクチゾウムシ科. 原色日本甲虫図鑑 (IV), pp. 265-268, pl. 52. 保育社, 大阪.

(東京都八王子市, 大塩一郎)

○シンボリヒゲナガジョウカイの採集記録

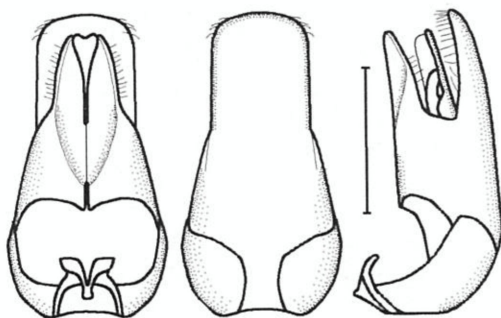
Micropodabrus shinborii TAKAHASHI シンボリヒゲナガジョウカイは、TAKAHASHI (1992) によって神奈川県丹沢山塊で採集された標本を基に新種として記載された。その後、高橋(1995)が山梨県からも記録しているが、今回、長野県南西部で本種を採集することができたので、その交尾器の図を添えて報告する。

2♂2♀♀, 長野県下伊那郡上村遠山林道(標高1800 m 付近) 1. VI. 1999, 桐山 功採集。



Micropodabrus shinborii TAKAHASHI

シンボリヒゲナガジョウカイ(長野県上村遠山林道産)



スケールは0.5mm

Micropodabrus longipes (WITTMER)

ナガヒメジョウカイ(奈良県十津川村北又谷産)

なお本種は近似種 *Micropodabrus longipes* (WITTMER) ナガヒメジョウカイのシノニムではないかと疑われているが、その交尾器は明らかに異なり、別種であると考えられる。比較のために type locality 近くで採集された同種の交尾器も併せて図示しておく。最後に確認のために本種の標本を頂き、さまざまな教示を賜った高橋和弘氏に厚く御礼申し上げます。

参考文献

TAKAHASHI, K., 1992. The fauna of Cantharidae in Kanagawa Pref. Japan. Kanagawa-Chûho, Yokohama, (100): 71-124.

高橋和弘, 1995. 「神奈川県ジョウカイボン科」の追補について. 神奈川虫報, (113): 19-37.

(岐阜市, 桐山 功)

○東北地方におけるニセフタオビノミハナカミキリの採集例

ニセフタオビノミハナカミキリ *Pidonia (Omphalodera) testacea* (MATSUSHITA, 1933) は、紀伊半島大峰山系、中部山岳地域、日光・帝釈山塊の山地帯の落葉広葉樹林から亜高山帯の針葉樹林にかけて生息する。しかし、飯豊・吾妻山塊以北の東北地方からの本種の報告は、ほとんどないものと思われる。筆者らは東北地方で採集しているので報告する。



ニセフタオビノミハナカミキリ

1) 1♀, 山形県西置賜郡小国町梶川峰(標高1,700 m), 9. VIII. 1989, 窪木幹夫採集(写真右).

モミジカラマツの花上から採集した。

2) 2♂♂, 山形県飽海郡遊佐町河原宿小屋, 8. VIII. 1995, 亀澤 洋採集(写真左).

セリ科草本の花上から採集した。

東北地方の日本海側に位置する飯豊山や鳥海山は、多雪地域として有名である。これらの山々では、ブナ林をぬけると、概ね標高1,400~1,500 mで亜高山帯になる。ニセフタオビノミハナカミキリが採集されたのは、この亜高山帯である。日本海側の亜高山帯では、アオモリトドマツのような針葉樹林が欠如し、積雪の多いところではミネカエデ、ナナカマド、ミヤマナラなどの落葉低木群落が発達している。本種は、盛夏まで雪渓や雪田が残り、融雪水で付近一帯がじめじめした環境に咲く草本類の花から採集された。今後、東北地方の亜高山帯の同様な環境の調査を行えば、ニセフタオビノミハナカミキリが他地域でも採集される可能性がある。

(東京都世田谷区, 窪木幹夫)

(埼玉県庄和町, 亀澤 洋)

三重県のタマキノコムシ*

保科英人・生川展行・市橋 甫

今まで三重県におけるタマキノコムシの記録は非常に少ない。これまで、生川ほか (1984 & 1989), HOSHINA (1998), HOSHINA & NARUKAWA (1988) のほか、いくつかの研究で、わずかに9種が記録されているにすぎなかった。これは、タマキノコムシが体長が小さく地味なこともあるが、種名の確定が難しいことが、主な原因であった。

今回、生川らが採集したタマキノコムシを、筆者の1人保科が検する機会を得たので、第一報として整理のできた分について、報告しておく。

なお、今回採集したタマキノコムシは、ハンドソーティングや、枯枝、細い倒木や立枯木のピーティング、倒木に生えたキノコより採集したものである。

日本で各県別のタマキノコムシのファウナは、ほとんど知られていない。よって本発表により、三重県は神奈川県とともに、最もタマキノコムシのファウナが解明されている都道府県と言えるだろう。

なお、保科以外の筆者と後述する謝辞に述べた方々により、三重県より採集されたタマキノコムシの数は膨大である。このため下に示す標本データは

一部であり、すべてではない。また、データの後に示されている (litter) という表記は、落葉中から採集されたことを表している。また、タマキノコムシのうち、最も同定が困難と思われる、*Agathidium* 属のうち、種数の多い *Neoceble* 亜属、*Agathidium* 亜属については検索表を付した。ただし、まだ未記録種を多く含むであろう現段階では、あくまで一過性のものであることは否めない。

本リストを発表するにあたり、同定と分類学的コメントは、筆者の一人保科が担当した。筆者らは、貴重な標本を恵みいただき発表を委ねられた天春明吉、横関秀行、官能健次、市川太の各位に深謝の意を表したい。今回の発表に関し、保科は多数の昆虫学者の方々から、貴重な比較標本を見る機会を頂いた。保科は、伊藤建夫氏、岸本年郎博士、直海俊一郎博士、中田勝之氏、野村周平博士、平野幸彦氏、丸山宗利氏 (五十音順) に厚く御礼申し上げる。また数々のご助言をいただいている久松定成博士、さらに愛媛大学所蔵のタイプ標本を見る便宜を与えてくださった同大学の大林延夫・酒井雅博両博士に深謝申し上げる。

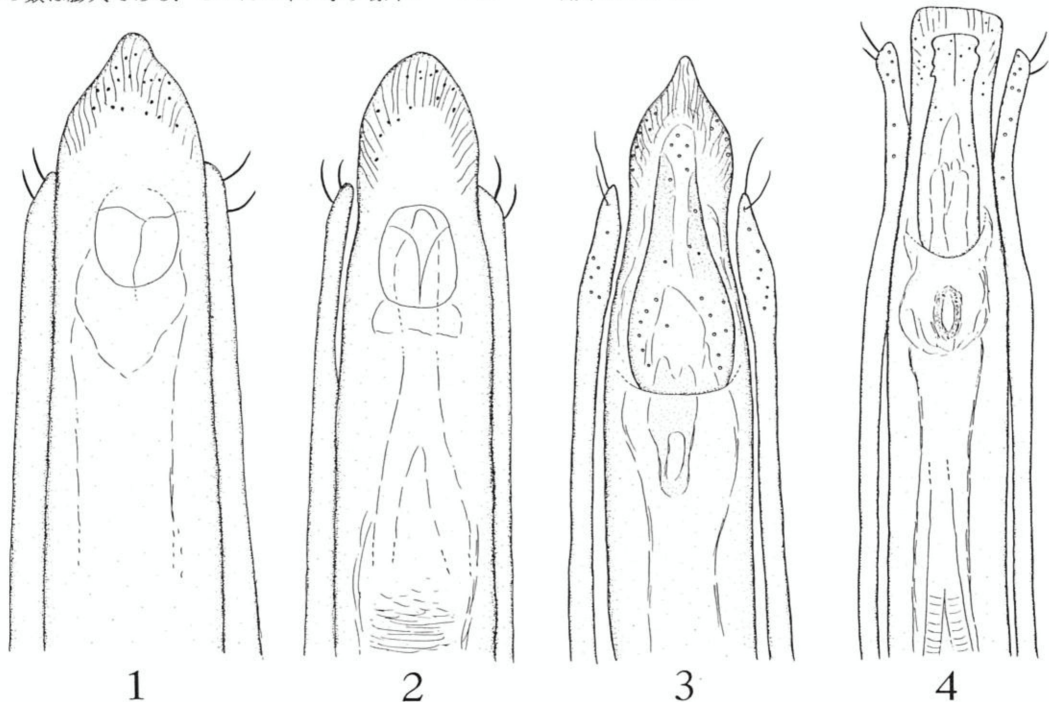


図1-4. オス交尾器先端 (腹側)。1. ノコギリマルタマキノコムシ; 2. ニセノコギリマルタマキノコムシ; 3. カツラギマルタマキノコムシ; 4. イシヅチマルタマキノコムシ。

* A list of the subfamily Leiodinae (Coleoptera: Leiodidae) in Mie Prefecture, Japan.

タマキノコムシ亜科 Leiodinae Scotocryptini 族
ダルマタマキノコムシ属(新称) *Creagrophorus*
コレキヨダルマタマキノコムシ(新称) *Creagrophorus japonicus* DAFFNER, 1989

4頭, 三重郡菰野町千草, 16.I. 1989, 天春明吉採集(litter).

保育社甲虫図鑑 p. 234 の「新属新種」とは、本種のことであろうか。しかし、本属は新属ではなく、古く中米から記載された属である。本属は、中米・インド・ネパールなど非常に限られた地点からのみ記録されている。なお余談であるが、以前筆者の一人保科は、英国の COOTER 氏から、香港産の本属の新種らしき標本を送られ、日本産種と比べてくれとの依頼を受けたことがある。いずれ、本属の世界における分布域はおいおい知られていくことになるう。

本属はかつて、Agathidiini 族に含められていた。しかし、WHEELER (1979) は *Creagrophorus* 属のモノグラフ的な論文で、*Creagrophorus* 属の再記載・再定義を行い、Scotocryptini 族との系統的な関連に言及した。その後 DAFFNER (1989) が本属を Scotocryptini 族に含まれるとして、日本から、本種を記載した。現在でも、*Creagrophorus* 属は、Scotocryptini に含める考えが主流である。Scotocryptini 族は、眼を欠く属を含んでいるが、*Creagrophorus* 属には立派な眼がある。なお、複眼を欠く Scotocryptini に含まれる属は主に南米に分布する。

さて、*Creagrophorus* は新属名「ダルマ」という名が示すとおり、体の隆起が強い。新和名の「コレキヨ」は、だるまという愛称で国民に親しまれ、総理大臣・農商務大臣・大蔵大臣・日本銀行総裁・第4代立憲政友会総裁等を歴任した、高橋是清(1854-1936)に由来する。

Leiodini 族

チビタマキノコムシ属 *Zeadolopus*

チビタマキノコムシ *Zeadolopus japonicus* (CHAMPION, 1924)

1頭, 熊野市榑ヶ崎, 17. XII. 1986, 市橋甫採集(litter).

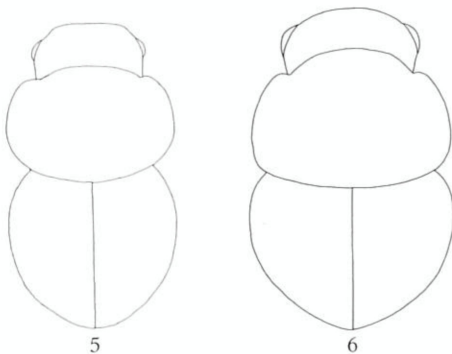


図5-6. 背面. 5. イシツチマルタマキノコムシ; 6. カツラギマルタマキノコムシ.

Pseudoliodini 族

ラクヨウタマキノコムシ属 *Colenis*

Colenis sp.

1頭, 度会郡紀勢町錦・錦峠, 18. XII. 1986, 天春明吉採集(litter).

Colenis terrena HISAMATSU, 1985 オチバヒメタマキノコムシは、ANGELINI & ŠVEC (1998) によって、*Dermatohomoeus* という属に移された。筆者の一人保科は、東欧ハンガリーのブタベストにある自然史博物館から、*Dermatohomoeus* 属の模式種 *D. guineensis* HLISNIKOVSKY, 1963 のタイプ標本を租借し、また愛媛大学において、*Colenis terrena* の模式標本を調べて、この措置が妥当であるとの結論に達した。そこで、属名と属和名を1対1の関係にするため、*Dermatohomoeus* 属には「ヒメタマキノコムシ属」、そして *Colenis* 属には「ラクヨウ(落葉)タマキノコムシ属」という和名を提唱したい。なお、保科は、*Colenis* 属の模式種、*C. immunda* (STRUM, 1807) の欧州産標本を有しているが、*C. terrena* とはだいぶ雰囲気が違う。この属の詳細は別の機会に譲りたい。このリストで示した sp. は投稿中の新種で、模式産地は福岡県の予定である。また天春氏採集の本標本はバラタイプとなる予定である。

Pseudocolenis 属

ウスイロヒメタマキノコムシ *Pseudocolenis hilleri* REITTER, 1884

3頭, 度会郡紀勢町錦, 19. I. 1997, 天春明吉採集(litter).

本種は、分類学的に問題を含んでいる。これに関しては、甲虫ニュース 第125号の保科の記事を参照ありたい。そして、問題を解決したあとに、属和名の変更を含め結果を報告したいと思う。

Agathidiini 族

クシヒゲタマキノコムシ属(新称) *Anisotoma*

ベニモンヒゲトタマキノコムシ *Anisotoma biplagiata* (PORTEVIN, 1927)

4頭, 多気郡宮川村父ヶ谷, 26. VII. 1987, 生川展行採集; 6頭, 一志郡美杉村平倉, 27. V. 1989, 市橋甫採集; 3頭, 度会郡大内山村南亦山, 8. VI. 1997, 市川太採集.

ハバビロタマキノコムシ *A. curta* (PORTEVIN, 1927)

1頭, 多気郡宮川村父ヶ谷, 26. VII. 1987, 生川展行採集.

採集例はこれのみ。本属の模式種で、本種と近縁な *Anisotoma glabra* という種が、東京周辺(Envi-rons de Tokio, 日光あたりのことか?)から、PORTEVIN (1908) によって記録されている。しかし、それ以降の日本からの *A. glabra* の採集公式記録はない。*A. glabra* は欧州から極東ロシアまで広く分布している種であるが、ANGELINI & DEMARZO (1988) は、*A. glabra* を日本産種として記録しているものの、日本産の標本は実際には見ていない。この *A. glabra* と *A. curta* は非常に酷似しているため、区別は難しい。筆者の1人保科は、この日本産

A. glabra は *A. curta* の同定間違いではないかという疑念を抱いている。もちろん、かつての帝都東京と日本国首都東京の環境は全く異なるであろうから、かつては *A. glabra* が生息していたのかもしれないし、現在も分布するものの採れないだけかもしれない。いずれにせよ PORTEVIN のコレクションは、パリの自然史博物館に所蔵されているので、それを調べれば *A. glabra* が本当に日本に分布するのか否かがはっきりするようになる。しかし、保科は以前、PORTEVIN のコレクションに所蔵されていると思われる、*Zeadolopus sinensis* (PORTEVIN) のタイプ標本の借用を当局に願っていたところ、「見つかりません。ごめんなさい」と返事されたことがある。単にコレクションの整理が悪いのか、それとも紛失したのかはわからない。しかし、別にタイプでもなんでもない(模式産地は欧州)日本産 *A. glabra* とされた標本が、現在でも PORTEVIN のコレクションの中に、見つかるという保障はない。
ズモンタマキノコムシ *A. frontalis* (PORTEVIN, 1927)

1 頭、度会郡大内山村南亦山, 15. VII. 1995, 生川展行採集; 1 頭, 29. VII. 1995, 生川展行採集; 1 頭, 19. VIII. 1995, 生川展行採集。

本文においては従来の和名を踏襲したが、実は保育社甲虫図鑑で示されているズモンタマキノコムシの写真と解説文は、*A. annae* という種である。日本産本属はシノニムや新亜種等の問題を含んでおり、保科は属名に対応した種和名の変更等を含め、日本産本属の紹介記事を、近く適当な和文ニュースレターに投稿予定である。

セマルタマキノコムシ属(新称) *Cyrtoplastus*
セマルタマキノコムシ *Cyrtoplastus seriepunctatus* (BRISOUT, 1867)

3 頭、四日市市小牧町, 12. VI. 1995, 天春明吉採集; 3 頭, 21. VI. 1995, 市橋甫採集。

アカバタマキノコムシ属(新称)
アカバタマキノコムシ(改称) *Sphaeroliodes rufescens* PORTEVIN, 1905

2 頭、員弁郡北勢町悟入谷, 17. V. 1994, 官能健次採集; 1 頭, 多気郡宮川村総門林道, 29. IV. 1997, 官能健次採集; 1 頭, 上野市諏訪, 24. X. 1997, 横関秀行採集; 5 頭, 亀山市野登山, 2. XI. 1997, 市橋甫採集; 2 頭, 上野市高山, 9. V. 1998, 天春明吉採集; 1 頭, 上野市西山高旗山, 9. V. 1998, 横関秀行採集。

本種の和名はアカバマルタマキノコムシであったが、マルタマキノコムシ=*Agathidium* 属とし、別属には別の属和名を与えたほうがよいと考え、本属・本種にはアカバタマキノコムシという和名を提唱したい。

マルタマキノコムシ属 *Agathidium*

Cyphocheble 亜属

ウスゲマルタマキノコムシ *A. (C.) nipponicum*
ANGELINI & DeMARZO, 1988

8 頭、員弁郡藤原町山口タテ谷, 20. V. 1995, 横関秀行採集(litter); 1 頭、度会郡大内山村南亦山, 31. V. 1995, 官能健次採集; 1 頭, 4. XI. 1996, 官能健次採集。

本種は、頭部・前胸背板・上翅に、密度は低いが半透明の微細な毛を生やす。この特徴で、同属他種との区別は容易である。この毛が生えるという特異的な形質は、原記載や検索表の中で一切触れられていないが、筆者の一人保科は、ジュネーブ自然史博物館所蔵のタイプ標本が同様の形質を持つことを確認した。また原記載では、note の中で次種 *A. (C.) subcostatum* との区別をいろいろ丁寧に書いてあるが、前述の毛のほか、本種は次種よりも体が細長であるので、間違えることはまずない。

オオマルタマキノコムシ *A. (C.) subcostatum* PORTEVIN, 1905

1 頭、一志郡美杉村平倉, 8. VI. 1986, 横関秀行採集; 1 頭, 27. V. 1989, 市橋甫採集; 1 頭, 度会郡大内山村南亦山, 15. X. 1994, 横関秀行採集; 1 頭, 11. XI. 1995, 市川太採集; 3 頭, 2. VI. 1996, 市川太採集。

Neocheble 亜属

1. 背面は明瞭な斑紋を持つ 2
 - 背面はほぼ単色 3
 2. 前胸背板は黒色でやややすい周縁部を持つ サガミモンマルタマキノコムシ
 - 前胸背板は黄銅色で黒色の 2 つの斑紋を持つ セモンマルタマキノコムシ
 3. 後翅を持たない。上翅はほぼ無点刻で、会合部小溝を欠くか、不明瞭 4
 - 後翅を持つ。上翅は明瞭な点刻を有し、会合部小溝は明瞭 5
 4. 触角第 3 節は第 2 節とほぼ同長 ギオンマルタマキノコムシ
 - 触角第 3 節は第 2 節より明らかに短い タバルザカマルタマキノコムシ
 5. 頭部は複眼の後方で最大幅となる ルイスマヤザンマルタマキノコムシ
 - 頭部は複眼で最大幅となる 6
 6. 頭部は相対的に大きく、幅は前胸背板の 0.7 倍ぐらい タカネマルタマキノコムシ
 - 頭部は相対的に小さく、幅は前胸背板の半分ぐらい 7
 7. 触角第 7 節は縦長 ヒゲナガマルタマキノコムシ
 - 触角第 7 節は横長 8
 8. 上翅は、基部 3 分の 1 から、弧を描くように単純に曲がる。オス交尾器は先端近くで急激に細くなる(図 1) ノコギリマルタマキノコムシ
 - 上翅は、基部 4 分の 1 から、前種と比べて相対的に急に曲がる。オス交尾器の先端は単純に丸まる(図 2) ニセノコギリマルタマキノコムシ
- サガミモンマルタマキノコムシ *A. (N.) yukihiroi*
HOSHINA, 1997

1頭, 度会郡大内山村南赤山, 2. VI. 1996, 市川太採集 (litter); 1頭, 員弁郡北勢町悟入谷, 29. XII. 1997, 天春明吉採集 (litter).

本種は模式産地の神奈川県以外では, 今回初記録である. 保科は, 本種の前記載で, 左右の大顎がほぼ同じとした. 事実タイプシリーズはそうなのであるが, 悟入谷から採集されたオスは, 左大顎が明らかに肥大化し, ツノ状になっている.

セモンマルタマキノコムシ *A. (N.) derispioides* NAKANE, 1954

1頭, 員弁郡藤原町御池岳, 3. V. 1989, 生川展行採集; 1頭, 亀山市野登山, 20. IV. 1997, 生川展行採集 (litter).

ギオンマルタマキノコムシ (新称) *A. (N.) funereum* ANGELINI & DeMARZO, 1988

1頭, 一志郡美杉村平倉, 2. X. 1993, 伊藤建夫採集; 1頭, 員弁郡藤原町山口タテ谷, 20. V. 1995, 横関秀行採集 (litter); 1頭, 安芸郡芸濃町, 23. XII. 1995, 市橋甫採集 (litter); 1頭, 上野市御斎峠, 29. III. 1997, 横関秀行採集 (litter); 3頭, 伊勢市高麗広, 10. I. 1998, 市橋甫採集 (litter).

上記のデータのほか採集例は, はなはだ多い. 現在筆者の一人保科は, 本種のタイプ標本を, ジュネーブ自然史博物館より租借している. 本種は, 関西から関東地方に分布するが, そのオス交尾器の個体変異を観察すると, 関東産は先端が幅広く, 模式産地である京都を含む関西産は, 先端の幅がやや狭い. 三重県産は, タイプ標本に近い. 原記載はもちろん関西産をもとに書かれている. このように検討していくと, 関東産本種は *A. (N.) fujiyamaense* HOSHINA, 1997 と同物である可能性がある. これをふまえ, 保科は *A. (N.) fujiyamaense* を本種の亜種へと格下げするか, シノニムとするか, 二つの方向で検討している. 和名は模式産地京都の有名な地名からとった. 「素直にキョウトマルタマキノコムシにしる」という方もあろうが, *A. (N.) kyotoense* ANGELINI & DeMARZO という別種が存在するので, やむなく? 祇園にした. 基本的にタマキノコムシは, 同属内で似たような種ばかり存在する場合が多く, 形態的特徴を示す気のきいた和名がなかなか思いつかない. 模式産地から和名をつけてしまうことが多いのだが, こういった事情を理解していただきたいと願う.

タバルザカマルタマキノコムシ (新称) *A. (N.) pic-eolum* HLISNIKOVSKY, 1964

1頭, 安芸郡芸濃町, 23. XII. 1995, 市橋甫採集 (litter); 2頭, 度会郡大内山村南赤山, 19. XI. 1995, 官能健次採集; 2頭, 2. VI. 1996, 市川太採集 (litter).

HLISNIKOVSKY (1964) は, 本種のタイプ標本の採集データは, Japan, Ichiuchi, IV. 30, 1900 としか述べていない. この採集年が正しいとすれば, 本種のタイプはルイスの採集品ではない. しかし, 実際にタイプ標本を調べた ANGELINI & DeMARZO

(1988) は, 本種のタイプは, ルイスのコレクションによるものとし, また Ichiuchi は四国の石鎚山ではないかと推測している. こころあたりの判断が難しいところだが, 草間 (1971) によると, 明治14年 (1881年) 4月30日に, ルイスは九州熊本県の Ichiuchi というところを訪れている. また HLISNIKOVSKY (1964) が日本から記載した種は, すべてルイスの採集品をもとに書かれているので, 本種もルイスのコレクションによるものと考えるのが妥当であろう. よってとりあえず, 九州の Ichiuchi を模式産地としておきたい. 新和名は九州南西部で歴史的に有名な地名で, 薩軍敢闘の地「田原坂」に由来する. なお, 野村周平博士は, 佐賀県から本種オス個体を採集しており, 本種の模式産地が九州か否かを別にしても, 本種が九州に分布することは確実である.

ルイスマヤサンマルタマキノコムシ *A. (N.) curtipenne* HLISNIKOVSKY, 1964

2頭, 四日市市小牧町, 11. I. 1994, 天春明吉採集; 2頭, 志摩郡大王町船越, 21. V. 1994, 横関秀行採集; 1頭, 上野市諏訪, 7. XII. 1996, 横関秀行採集 (litter).

本種は, ルイスが神戸から採集したメス1頭の標本をもとに記載されたが, 長らく正体不明であった. しかし, 筆者の一人保科は, 上記の採集標本等をもとに, オス交尾器を観察し, またロンドンの自然史博物館所蔵のタイプ標本との比較により, 本種と同定することができた. なお, 保科は毎年のように神戸市摩耶山に採集にでかけているが, いまだに模式産地で本種に巡り会ったことがない.

タカネマルタマキノコムシ (新称) *A. (N.) aeneum* ANGELINI & DeMARZO, 1988

1頭, 多気郡宮川村大和谷林道, 3. V. 1994, 横関秀行採集 (litter); 1頭, 度会郡大内山村南赤山, 11. IV. 1996, 天春明吉採集.

採集例はこの2例のみ. 本種は四国石鎚山から新種記載されたものであるが, その他の地域からの記録は今回が初めてである. なお, 未発表ながら筆者の一人保科は九州産の個体を採集しており, 実際は広く分布しているようである.

ヒゲナガマルタマキノコムシ *A. (N.) longicorne* PORTEVIN, 1908

1頭, 員弁郡藤原町御池岳, 3. V. 1989, 生川展行採集.

ノコギリマルタマキノコムシ *A. (N.) cribratum* PORTEVIN, 1905

2頭, 度会郡大内山村南赤山, 17. IV. 1995, 官能健次採集; 4頭, 11. IV. 1996, 天春明吉採集; 5頭, 亀山市野登山, 20. IV. 1997, 市川太採集; 1頭, 多気郡宮川村総門山, 29. IV. 1997, 生川展行採集.

ニセノコギリマルタマキノコムシ (新称) *A. (N.) dubium*, PORTEVIN, 1908

1頭, 多気郡宮川村父ヶ谷, 7. VIII. 1988, 生川展行採集; 1頭, 度会郡大内山村南赤山, 11. IV. 1996,

天春明吉採集.

以前筆者の一人保科は、バリの自然史博物館から本種タイプを租借した。詳細は別の機会に譲るが、日本産のある種が本種のシノニムとなる可能性がある。

Agathidium 亜属

1. 後翅を持つ2
- 後翅を持たない4
2. 上翅の点刻の密度は粗で、会合部小溝を欠く…
.....ツヤマルタマキノコムシ
- 上翅は明瞭な点刻を有し、会合部小溝は明瞭…
.....3
3. 頭部は複眼の後方で最大幅となる.....
.....ニセオオマルタマキノコムシ
- 頭部は複眼で最大幅となる.....
.....マルムネマルタマキノコムシ
4. 体は相対的に細長い (図5)。オス交尾器先端は
直線に近い (図3) …イシツチマルタマキノコムシ
- 体は相対的に幅広い (図6)。交尾器先端は尖る
(図4)カツラギマルタマキノコムシ

ツヤマルタマキノコムシ *A. (A.) sublaevigatum* PORTEVIN, 1908

1 頭, 一志郡美杉村平倉, 27. V. 1989, 天春明吉採集 (litter); 3 頭, 四日市市小牧町, 11. IV. 1994, 天春明吉採集.

ニセオオマルタマキノコムシ *A. (A.) carniceps* HISAMATSU, 1956

2 頭, 一志郡美杉村平倉, 27. V. 1989, 市橋甫採集 (litter); 2 頭, 2. X. 1993, 伊藤建夫採集; 1 頭, 度会郡大内山村南亦山, 22. X. 1995, 市川太採集 (litter); 2 頭, 12. X. 1997, 官能健次採集 (litter); 1 頭, 阿山郡島ヶ原村奥村三国越, 25. II. 1996, 生川展行採集 (litter); 2 頭, 上野市西山高旗山, 25. VIII. 1996, 横関秀行採集 (litter).

上記のほか, 採集例は多い。

マルムネマルタマキノコムシ (改称) *A. (A.) crassicornis* PORTEVIN, 1908

1 頭, 度会郡大内山村南亦山, 28. V. 1995, 天春明吉採集 (litter); 1 頭, 22. X. 1995, 市川太採集 (litter); 1 頭, 上野市寺田, 13. IV. 1997, 横関秀行採集 (litter); 15 頭, 員弁郡北勢町悟入谷, 29. XII. 1997, 天春明吉採集 (litter).

本種の和名は従来, マルムネタマキノコムシであった。しかし *Agathidium* 属=マルタマキノコムシ属と統一するのが適当であると考えたため, マルムネマルタマキノコムシという新和名を提唱したい。

イシツチマルタマキノコムシ *A. (A.) bivesciculatum* ANGELINI & DeMARZO, 1988

2 頭, 北牟婁郡海山町, 3. XI. 1987, 横関秀行採集 (litter); 2 頭, 熊野市産田神社, 26. IX. 1993, 横関秀行採集 (litter); 2 頭, 度会郡南島町能見峠, 11. X. 1993, 横関秀行採集 (litter).

本種はメス個体をもとに石鎚山から記載された種

である。筆者の一人保科は、ジュネーブの自然史博物館からタイプ標本を租借し、手持ちの標本との比較によって、未発表ではあるが、対応するオスを明らかにすることができた。また保科は1998年昆虫学会九州支部会において、本亜属の分類に関して講演した。本亜属に含まれる日本産種は、基本的に分布範囲は狭いが、本種は、三重県から九州南部まで分布する数少ない例外の一つである。さらに、本種は体サイズや生息する標高にも差がある。原記載では、本種の大きさは、3 mm とあるが、このサイズは大きい方とあっていただきたい。そして、模式産地は前述のとおり石鎚山であるが、伊藤建夫氏は高知県の足摺岬から本種を採集しており、イシツチマルタマキノコムシの生息する場所は多様に富んでいる。

カツラギマルタマキノコムシ *A. (A.) katsuragiae* HOSHINA, 1998

4 頭, 鈴鹿郡関町鈴鹿峠, 23. XI. 1993, 横関秀行採集; 1 頭, 一志郡美杉村平倉, 28. V. 1994, 横関秀行採集; 1 頭, 熊野市橋ヶ崎, 17. XII. 1986, 市橋甫採集 (litter); 1 頭, 尾鷲町九鬼町, 13. V. 1988, 天春明吉採集 (litter); 8 頭, 三重郡菰野町切畑, 22. V. 1998, 天春明吉採集 (litter).

本種とイシツチマルタマキノコムシは後翅を欠く。*Agathidium* 属 *Agathidium* 亜属は、後翅を欠く種が多い。しかし、岸本博士、直海博士、野村博士、丸山氏採集の本亜属関東産タマキノコムシのコレクションには、後翅を欠く種が見あたらない。理由はわからないが、本亜属で後翅を欠く種の分布は、この三重県を東限としてぷつぷつと切れてしまう。また保科は、石川県在住の中田勝之氏から北陸産のタマキノコムシを検する機会を頂いたが、やはり後翅を欠く本亜属の標本は見受けられなかった。平野編 (1998) の神奈川県産のタマキノコムシのリストには、後翅を欠く *A. (A.) fornicatum* HLISNIKOVSKY メボソマルタマキノコムシの名が見える。これはおそらく誤りである。しかし、この誤同定は、本リストの筆者の一人保科によるものであり、平野幸彦氏に一切の責がないことを、ここに明らかに述べておくとともに、関係者の方々に深くお詫びしたい。これらの後翅を欠く種々の同定は非常に困難であり、確実な同定はオス交尾器を比較するしかない。また一部の種は同所的に分布しており、ますます同定の困難さに拍車をかけている。

Microceble 亜属

ジョウシュウマルタマキノコムシ (新称) *A. (M.) carinatum* ANGELINI & DeMARZO, 1988

1 頭, 名張市青蓮寺ダム, 8. XII. 1993, 横関秀行採集 (litter); 1 頭, 一志郡美杉村平倉, 27. V. 1989, 天春明吉採集 (litter); 4 頭, 16. VIII. 1992, 天春明吉採集 (litter).

和名は、模式産地の関東地方北部の「上州」による。

Macroceble 亜属

サクラギマルタマキノコムシ *A. (M.) sakuragiae*
HOSHINA & NARUKAWA, 1998

2頭, 南牟婁郡紀和町布引滝, 11. V. 1996, 生川
展行採集.

2頭, 伊勢市剣峠, 28. I. 1996, 生川展行採集; 1
頭, 伊勢市高麗広, 31. I. 1998, 天春明吉採集
(litter).

参考文献

- ANGELINI, F., & L. De. MARZO, 1988. Anisotomini del
Giappone (Coleoptera, Leiodidae). *Ent., Bari*, 23: 47-
122.
- ANGELINI, F., & Z. ŠVEC, 1998. Two new species of Leiodi-
inae from India and Vietnam with taxonomic and
distributional notes (Coleoptera: Leiodidae). *Acta
Soc. Zool. Bohem.*, 62: 1-5.
- DAFFNER, H., 1989. Eine neue Art der Gattung *Creagro-
phorus* MATTHEWS, 1888, aus Japan (Coleoptera, Lei-
odidae, Scotocryptini). *Acta. Coleopterol. (Munch)*, 5:
53-55.
- 平野幸彦編, 1998. 神奈川県産甲虫類目録. 神奈川県報特
別号, (2): 35-124.
- HLISNIKOVSKY, J., 1964. Monographische Bearbeitung

der Gattung *Agathidium* PANZER (Coleoptera). *Acta
ent. Mus. nat. Prag. suppl.*, 5: 1-255.

HOSHINA, H., & N. NARUKAWA, 1998. Discovery of the
subgenus *Macroceble* of the genus *Agathidium* (Col-
eoptera: Leiodidae), from Honshu, Japan, with de-
scriptions of two new species. *Ent. Rev. Jpn.*, 53: 49-
57.

HOSHINA, H., 1998. Two new species of the genus *Agath-
idium* (Coleoptera: Leiodidae) from Japan. *Ent. Rev.
Jpn.*, 53: 59-66.

草間慶一, 1971. ジョージ・ルイスの足跡について (上).
月刊むし, (8): 18-23.

生川展行ほか, 1984. 比奈知地域(三重県名張市)の甲虫
相. 比奈知ダム周辺昆虫調査報告書: 137-191.

生川展行ほか, 1989. 平倉演習林の甲虫. ひらくら, (33):
88-141.

PORTEVIN, G., 1908. Quatrième note sur les Nécrophages
du Muséum. *Bull. Mus. Hist. nat. Paris*: 19-29.

WHEELER, Q., 1979. Revision and cladistics of the middle
American genus *Creagrophorus* MATTHEWS (Coleopt-
era: Leiodidae). *Quaest. Ent.*, 15: 447-479.

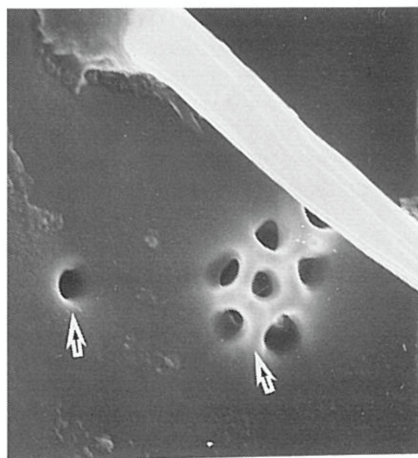
(保科: 九州大学農学部昆虫学教室)

(生川: 三重県鈴鹿市)

(市橋: 三重県菰野町)

〇オオアオコメツキ類にみられる上翅の分泌孔

日本にはオオアオコメツキ属 *Campsosternus* の
種はヨツモンオオアオコメツキ *C. matsumurae* と
ノブオオアオコメツキ *C. nobuoi* の2種が分布し
ており, いずれも金属光沢を有する美麗種である.
とくに上翅は平滑状で強い光沢を有する.



ノブオオアオコメツキの上翅の分泌孔(↑印)

昆虫類の体の表面に生ずる毛の周辺には, ほとん
ど例外なく1個または2~3個の分泌孔が開いてい
ることが判明しており, ルイスクシコメツキ *M.
lewisii* の例は大平(1996)が示した. ところが, 上記

の2種のオオアオコメツキの上翅の毛根(一見毛は
生じていないようにみえるが, 退化した毛が散在し
ている)の後部の周辺には図示したような数個の分
泌孔群が存在する. 図示(約5,000倍)したのはノ
ブオオアオコメツキの右上翅のもので, 孔の数や
集まりかたは一定していないが, 通常6~10個の集
団で存在する. しかし, これが上翅の光彩にどのよ
うに関わっているのかは不明である. あまり知られ
ていない形態なので, ここに紹介することにした.

引用文献

大平仁夫, 1996. コメツキムシ類の表皮面の分泌孔. 北九
州の昆虫, 43(1): 26.

(愛知県岡崎市, 大平仁夫)

〇マルガタオオヨツボシゴミムシを竹富島で採集

従来, 八重山諸島でも西表島からのみ記録されて
いたマルガタオオヨツボシゴミムシ *Craspedopho-
rus mandarinus* (SCHAUM) を竹富島で採集したので
報告する.

1頭, 八重山諸島竹富島東屋敷, 3. V. 1998, 新堀
豊彦採集.

舗装されていない道路上を午前中に歩行していた
もの.

本種の同定についてご協力をいただいた菊部治
紀・秋山秀雄両氏, 菊部氏を通じ分布状況について
ご教示をいただいた森田誠司氏, ならびに採集に同
行していただいた伊藤正宏氏に感謝申し上げます.

(神奈川県横浜市, 新堀豊彦)

アリスアトキリゴミムシとカワラケアリの関連について

豊田 浩二

Lachnoderma asperum BATES アリスアトキリゴミムシは George LEWIS が 1880 年に神奈川県箱根宮ノ下より採集した個体を基に記載されたアトキリゴミムシである。BATES の原記載によれば『1880 年 5 月 3 日、1 頭は石の下、もう 1 頭はアリの巢中にて食われた部分 (原典は英文)』と説明があり、この採集事例が好蟻性の印象を与え、和名のアリス (蟻巣) の語源となった。しかしながら、その後の採集例は決して多くはなく、ほとんどが灯火採集の例であったことから、好蟻性についても不明のままであった。また、和名の「アリス」はアリスアブなどでも問題になったが、一見して好蟻性を指す名前とは判断しにくいようで、人名か何かと勘違いされることもある (アリスアブでは最初に「アリノス」が使用されていることもあり、アリスからアリノスへ和名の統一がなされている)。これが本種を好蟻性の種と予想しての採集に導けなかった大きな要因であろう。最近になって、栃木県の渡良瀬川流域でかなりの個体数が採集されているという話もあるが、やはりアリとの関係については無視されているらしく、生態についてはいっこうに解明が進まないままである。

筆者はこの度、本種の好蟻性を思わせる行動をいくつか観察しているので、本種の数少ない生態的知見として取りまとめ報告する。

アリの行列からの採集例

1997 年春、入院中の松本慶一氏のところへ見舞いに行った際、関西方面で得られた本種の標本を見せていただいた。この個体の鮮やかな茶褐色は、図鑑で見る赤味がかったものとはずいぶん違うイメージであり、まるでハムシダマシのような外見、色彩であった。しかもアリの行列から得られたものらしく、驚きの連続であった。これが筆者の知り得た、好蟻性を思わせる最初の知見である。

その同じ年の 8 月、埼玉県東松山市の都幾川河川敷 (図 1) にてハンショウ類を採集していた筆者は、偶然にも、ヨシ原からつながるアリの行列より本種を採集した。アリの種類は *Lasius sakagamii* カワラケアリであり、良好な環境の河川敷にはわりと普通に見られる種類である。また、アリの行列を歩く本種は一見してそれと判らず、やはりハムシダマシによく似ていた。アリからの攻撃はいっさいなく、堂々と行列を歩くその姿は好蟻性の種を思わせるに十分なものであった。

アリの巣の内部及び周辺からの採集例

翌 1998 年に入り、同じ都幾川河川敷のやや上流部に好蟻性甲虫の採集を行っていた筆者は、春季に河川敷の石下に形成されるアリの巣を片っ端から観察していたが、その際、巨大なカワラケアリの巣内から本種を採集した。この個体は前例の色彩とは

大きく異なり、全身真黒のこれまでに知られていないものであった。完全な老熟個体と思われるが、念のため写真で示しておく (図 2)。この個体は無数のアリが徘徊する巣内においてもやはり攻撃を受けず、ゆっくりと巣内を闊歩しており、餌として運び込まれていたマルガタゴミムシ類とは対照的であった。

その後、約半月の間にカワラケアリの巣中及び周辺の石下から複数個体が得られたが、アリとの接触の際、後部背面をアリが触角で触るといった行動が 3 回観察された (図 3)。また、この時の採集個体はかなり狭い箇所集中して見られ、ほとんどは半径 3 メートルにも満たない範囲より得られた。

食性について

多くの個体が採集されたが、この時点でいくつか疑問が残っていた。ひとつは食性について、もうひとつはアリの巣中のみでなく周辺の石下からも得られるのはなぜかということであった。

食性について解明するため、得られた個体を個別に容器に入れて飼育下での観察を行った。餌とするものは基本的に現地調達とし、周辺に見られた可能性のありそうなものはすべて与えて見た (表 1)。最も可能性の高いカワラケアリの成虫 (働きアリ) については、常に 10 分程で死滅してしまい、摂食行動は観察できなかった。容器を空けて気づいたのであるが、アトキリゴミムシ類特有のガス臭が漂っていたので、おそらくアリの死因はこのガスによるものと考えられる。カワラケアリの幼虫については口器で触れるなど興味は示していたが、やはり食することはなかった。同じ河原で見られるシワアリの 1 種の成虫、幼虫についても試したが、こちらはまったく興味を示さず、関係ないものと思われる。

東京農業大学の岡島秀治先生より「アリの巣中に見られるシジミチョウの幼虫などを食べているのでは」とのご指摘を頂き、シジミチョウの幼虫を入手できなかったことから、他の種の幼虫を与えてみることにした。近くのヤナギの木にいたジャクガの 1 種の幼虫については、そのままでは興味を示さず、傷をつけて体液を染み出させたところ、少々の摂食がみとめられた。試しに自宅で飼育していたゴマダラチョウの幼虫も与えてみたところ、ほぼ同じ反応を示し、他のアトキリゴミムシ同様、鱗翅類の幼虫を好む傾向があるとの印象を受けた。なお、石下に多く見られたヤスデ類の 1 種や、ヤナギの木に見られカワラケアリと関係していたアブラムシの 1 種にはいっさい興味を示さなかった。

結局、鱗翅類の幼虫を若干食べただけで、十分な結果は得られませんすべての個体が餓死してしまった。本種は草地のスウィーピングで得られることもあるようなので (松本氏私信)、鱗翅類を好んで



図1. アリスアトキリゴミムシの得られた東松山市都幾川の河川敷

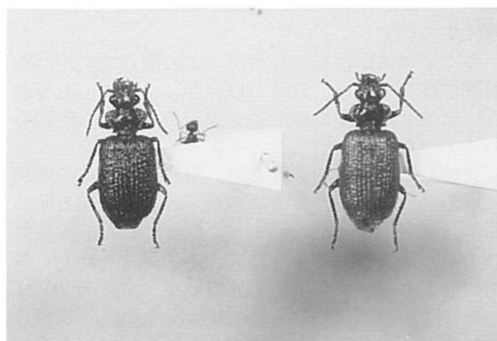


図2. アリの巢中より得られた黒色の個体(左: 黒色個体, 右: 通常の個体)



図3. アリスアトキリゴミムシの背面を触角で触れるカワラケアリ

節食している可能性も十分にある。しかし、アリとの関係を考えて、鱗翅類の摂食例はただ単に水分補給のためとも考えられる。

アリの行列周辺での観察例

同年6月下旬、すでに草地にはカワラケアリの行列が形成されており、夜間観察を実施した。カワラ



図4. アリが触角に噛み付いたままの標本

表1. 食性確認の結果

食餌と考えられる生物	与えた様子
カワラケアリ(成虫)	×(死滅)
カワラケアリ(幼虫)	×(興味有り)
シワアリの1種(成虫)	×
シワアリの1種(幼虫)	×
アブラムシの1種	×
ジャクガの1種(幼虫)	○(少しだけ)
ゴマダラチョウ(幼虫)	○(少しだけ)
ヤスデの1種	×
ナメクジの1種	×

○=食べた, ×=食べなかったの意味

ケアリは草の根際から茎部にかけて土と枯草の混ざった壁をつくり、中のアブラムシから甘露をもらっている。この場所と巣をつなぐ間の行列を見ていったところ、巣の入り口付近にて枯草の上にアリスアトキリゴミムシを見出した。しかもこの個体はアリを咥えて格闘の最中であり、すばやく毒ビンに入れたところ、アリが触角に噛み付いたままの奇妙な標本となった(図4)。この事例は、アリが餌としてアリスアトキリゴミムシを襲ったのか、またその逆であるのかは不明であるが、興味深い観察例である。

季節消長など

本種が活動を始めるのは3月下旬頃からと思われるが、越冬場所に関する知見はほとんど例がない。針葉樹の朽木より掘り出された例(斎藤, 1999)があるが、個体数は少なく、本来の越冬場所とは思えない。筆者の観察例から判断すると、カワラケアリの越冬集団内もしくは周辺の石の下とも考えられる。春季に見られる成虫はいずれも老熟個体であり、おそらく4月から5にかけて交尾行動が行われるものと思われる。その後新成虫は6月下旬からアリの行列付近で得られているが、幼虫の生息場所は不明である。

本種的好蟻性について、笠原(1992)では、LEWISの採集個体は餌として持ち込まれた死骸であろうとの推測がなされ、好蟻性については否定している。これは当時の一般的な考えであり、採集例の少ない

この時点では当然の判断であろう。しかしながら、このたびのいくつかの事例により、本種が好蟻性である可能性が新たに浮上してきたといえる。

なお、筆者が観察した埼玉県下においては、梶村(1961)の浦和市田島における例が唯一のものであったので、数少ない例として以下にデータを示す。

1頭、埼玉県東松山市下押垂(都幾川河川敷のオギ原にて、カワラケアリの行列より)、23. VIII. 1997; 1頭(黒色)、同市上押垂(都幾川河川敷の荒地、カワラケアリの巣中より)、29. III. 1998; 5頭、同所、5. IV. 1998; 4頭、同所、11. IV. 1998; 3頭、同所、16. IV. 1998; 1頭(アリに噛み付かれている)、同所、25. VI. 1998、いずれも筆者採集、保管。

末筆ながら、本種についていろいろご教示頂いた東京農業大学の岡島秀治助教授、東京都高尾自然科

学博物館の松本慶一氏、採集に同行していただいた東京農業大学の岸本年郎、新井志保の両氏に厚く御礼申し上げる。

引用文献

BATES, H. W. 1883. Supplement to the geodephagous Coleoptera of Japan, chiefly from the collection of Mr. George Lewis, made during his second visit, from February, 1880, to September, 1881. *Trans. ent. Soc. London*, 1883: 205-290.

笠原須磨生, 1992. 神奈川県から記載された歩行虫類. 神奈川虫報, (100): 59-70.

斎藤勝雄, 1999. アリスアトキリゴミムシの採集例. インセクトマップオブ宮城, (10): 39.

(埼玉県嵐山町)

○四国におけるオオクロナガゴミムシの記録

1997年筆者が採集のため香川県下を訪れた際、失われつつある干潟などに好んで生息するハマベゴミムシ *Pogonus japonicus* PUTZEYS が採集されているという古くからある塩田で、ビットホールトラップを仕掛けてみたところ、塩田縁辺部のアシ原部分を中心にオオクロナガゴミムシ *Pterostichus* (*Eosteropus*) *prolongatus* (MORAWITZ) と考えられる種が採集された。

1♂4♀♀, 香川県坂出市王越町木沢港, 11-17. IX. 1997, 筆者採集・保管。

当初、関東で採集されている個体とは異なる雄腹端節上の瘤状突起の形状などから、本種とは別種かあるいは MORITA (1991) で記載された近似の別種で日本海側に分布するエチゴクロナガゴミムシ *P. (E.) sudai* MORITA である可能性を疑ったが、交尾器を抜いて検したところ、形態的特徴は *P. (E.) prolongatus* のそれと一致した。

さらに、同地から瀬戸内海を越えた中国地方の広範囲で本種の分布が知られていることを考えあわせると、これまで報告のなかった四国での分布はひどく妥当のようにも思われる。しかし、低湿地を好む本種の生息に適した環境を現今の四国平野部に見出すのはなかなか困難なことと思われる。なお、同地は産廃処理場計画で近く埋め立てられる予定である。

末筆になるが、今回の報告に際し有益な情報をご教示頂いた森田誠司、並びに採集地の案内に便宜を図ってくださった松本慶一の両氏にお礼申し上げる。

参考文献

MORITA, S., 1991. A new pterostichine carabid beetle from Niigata Prefecture, central Japan. *Elytra*, Tokyo, 19: 251-255.

中根猛彦, 1979. 日本の甲虫(新シリーズ) 57. ゴモクムシ亜科 11. 昆虫と自然, 14(7): 4-11.

TANAKA, K., 1958. Studies on the genus *Pterostichus* from Japan (I). Subgenus *Eosteropus* (Carabidae, Coleoptera). *Kontyû*, Tokyo, 26: 215-219.

(群馬県松井田町, 佐藤陽路樹)

○ミヤマツチハンミョウの富士山麓からの採集例

ミヤマツチハンミョウ *Meloe* (*Eurymeloe*) *brevicollis* PANZER は日本では本州(中北部)に分布し、高山の残雪付近や稜線などに夏に現れるとされている(黒沢, 1985)が、詳しい分布・生態情報は知られていないようである。また、長谷川道明ほか(1989)は本種を岐阜県白山(標高2,000 m付近)から記録するとともに、その地が分布の西南端にあたること、加えて、それまでの確実な記録は新潟・群馬県境の谷川岳が分布の南端にあたるものであったと述べている。その後の記録としても、筆者は新潟県北部を除く関東・中部地方ではたまたま長野県松本市(松本市史自然部門編集委員会, 1997)以外に知らないの、手元にある山梨県富士山麓産の標本を記録しておきたい。

1♀, 山梨県上九一色村天神平(標高約1,500 m), 22. V. 1999, 中村進一採集。

カラマツ植林地の中の伐採跡地にいたものという。

標本を筆者に恵与され、発表を委ねられた夢虫の会事務局長の中村進一氏に厚くお礼申し上げる。

引用文献

長谷川道明・中島恬・後藤常明, 1989. 甲虫ニュース, (87/88): 3.

黒沢良彦, 1985. 黒沢ほか編, 原色日本甲虫図鑑 3, pp. 411-414. 保育社, 大阪。

松本市史自然部門編集委員会, 1997. 松本市史自然部門調査報告書. viii+152+v. 松本市。

(神奈川県立生命の星・地球博物館, 高桑正敏)

○岐阜県初記録のサメハダチョッキリ

少し古い標本であるが、筆者は岐阜県未記録のサメハダチョッキリ *Byctiscus rugosus* (GEBLER) を採集しているので報告しておく。今から10年程前、ドロノキに生息しているムネビロイネゾウモドキを採るため白川村へ出かけた。柄の長い捕虫網でドロノキの上部をスーピングしたところ、サメハダチョッキリが5頭採れた。しかし、筆者はドロノキで採れたことと、体全体が金緑色であることからてっきりドロハマキチョッキリと思い込み何年か過ぎてしまった。数年前、ドロハマキチョッキリとベニシハマキチョッキリが同一種とされたので、それを確認しているときサメハダチョッキリであることに気づいた次第である。



5頭、岐阜県大野郡白川村荻町、5.VI.1988、野平照雄採集。

(岐阜県各務原市、野平照雄)

○トダイオオナガゴミシの採集記録

トダイオオナガゴミシ *Pterostichus kosakai* MORITA は1998年に南アルプス北沢峠北西の歌宿付近より採集された標本に基づき新種記載されたものである。筆者は山梨県早川町山伏峠より本種を採集し、あわせて若干の知見を得たので報告する。

10♂♂、山梨県早川町山伏峠(標高約1,900m)、29-30.V.1999、大川秀雄採集。

採集地の標高はおおよそ1,900mほどで、同時にマスマトナガゴミシ *P. masumotoi* TANAKA, MORITA et SUGA も見られ、マスマトナガゴミシのほうが個体数が感じとしては3~4倍多く見られた(*P. masumotoi* は6♂♂のみ採集)。MORITA (1998)によれば基準産地の歌宿付近では唯一雄の *P. masumotoi* が得られたとあり、同一種群に属する両種が同所的に分布するゾーンのあることが示唆されていた。

森田氏のご教示によれば *P. kosakai* は早春のみ見られるゴミシで、分布域が高所に限られるようであるとのことである。また、ゴミシ一般として春先に得られる個体は雄が多いようで、今回の採

集個体はすべて雄であった。

最後に種々お教えくださり発表することを勧められた森田誠司氏、採集にご一緒させていただいた恩田賢吾氏に厚くお礼申し上げる。

参考文献

MORITA, S., 1998. A new *Pterostichus* (Coleoptera, Carabidae) from the Southern Japanese Alps. *Elytra*, Tokyo, 26(2): 297-302.

(栃木県足利市、大川秀雄)

○岐阜県2頭目のヒイロホソナグチキ

岐阜県におけるヒイロホソナグチキ *Dapsiloderus nomurai* (NAKANE et HAYASHI) は1960年に1頭記録されている(鳥飼, 1967)が、その後はまったく採集されていない。今回、筆者は2頭目を採集したので報告する。ブナの葉を叩いていたら落ちてきたものである。



1頭、岐阜県古城郡河合村天生峠、20.VII.1997、野平照雄採集。

参考文献

鳥飼兵治, 1967. 飛騨地方の長朽木虫科について。生物教育, (2): 33-38.

(岐阜県各務原市、野平照雄)

○紀伊半島のオカモトツヤアナハネムシの記録

オカモトツヤアナハネムシ *Pedilus okamotoi* (KÔNO) は、特異な形態によりよく知られているが一般に個体数の少ない種である。紀伊半島(奈良県)からは数例記録があるが、筆者は1999年下記のように、これまで記録がなかった3カ所で、今年採集したので報告する。和歌山県からは初記録と思われる。

採集時のようすは、すべて下草に静止していた。

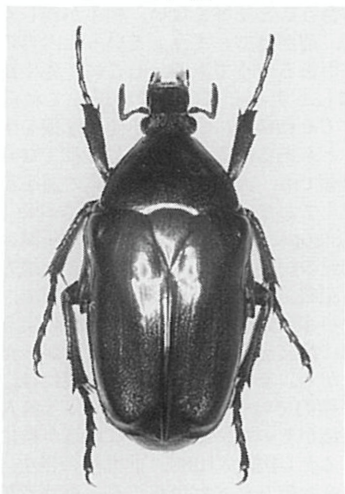
1♂、奈良県吉野郡上北山村和佐又山、22.V.1999; 1♂、奈良県吉野郡野迫川村荒神岳、9.VI.1999; 1♂、和歌山県日高郡龍神村護摩壇山、9.VI.1999.

(和歌山市、平松広吉)

○アオカナブンの藍黒色型を採集

アオカナブン *Rhomborrhina unicolor* MOTSCHULSKY は北海道から九州まで普通に見られ、カナブン類では最も北まで分布する種として知られている。筆者は長崎県五島列島福江島において、藍黒色をした本種を次のように採集したので報告する。

1♂1♀, 長崎県南松浦郡玉之浦町荒川郷, 19. VII. 1999; 2♂♂5♀♀, 同上, 20. VII. 1999; 1♀, 同上, 21. VII. 1999, 須田 亨採集。



照葉樹林に仕掛けたバナナトラップに多数のカナブン *Pseudotorynorhina japonica* HOPE に混じって来集していたもので数は少なく、狭い範囲でのみ見られた。背面はかなり黒みを帯びた藍色、腹面はやや明るい藍色をしており、普通のアオカナブンのような透明感のある光沢はなく、一見したところではクロカナブン *Rhomborrhina polita* WATERHOUSE を思わせる。また個体による変異はほとんど見られなかった。カナブンについては色彩の変異が激しく藍色の型も少ないながら得られるが、本種はオレンジ色を帯びるか、ごく稀に濃い赤色の個体が知られている以外変異に乏しく、今回のような色彩型は今まで正式な記録がない。

「五島の生物」によると五島列島では野崎島、中通島で本種の記録があるものの特別な記述はなされていないことから、通常の個体であったと思われる。今回緑色のアオカナブンは確認できなかったことから、福江島のみ亜種化している可能性もある。また対馬では紫色の個体が採集されているという情報も得ているが未確認である。いずれにしても今後の調査が期待される。

末文ながら、標本の同定並びにいろいろとご教示を賜った酒井 香氏に厚くお礼申し上げる。

参考文献

- 長崎県生物学会, 1981, 「五島の生物」。
酒井 香, 1993, 日本および台湾産のカナブン類, 月刊む

し, (272): 4-9.

(群馬県伊勢崎市, 須田 亨)

○アマミアラハダチャイロコメツキ沖縄本島に分布

アマミアラハダチャイロコメツキ *Reitterelater amamiensis* は、奄美大島八津野において採集された雄個体を正基準標本に指定して、筆者が新種として記載した体長 8 mm 内外の栗色をした種である。原記載以降、本種は岸井 (1989) が徳之島に分布することを報告しているため、現在での分布範囲は奄美大島と徳之島である。

筆者は長崎県の松尾照男氏の厚意で、同氏の教え子の松永齊大氏が琉球大学在学中に採集された多数のコメツキムシを見る機会を得たが、その中に国頭村我地林道において得られた本種を見いだした。これは沖縄本島から最初の記録である。



アマミアラハダチャイロコメツキ, 雌 (我地林道産)

体長は 7~9 mm 内外。体は栗色で幅広く、褐色毛を生ずる。触角は第 4 節から鋸歯状で、第 3 節は第 2 節の約 1.4 倍の長さで、第 4 節は第 3 節の約 1.3 倍の長さである。また、前胸背板の後角背面には各 2 本の隆起線を有する。終わりに、松永採集品を調査する機会を与えられた松尾照男氏に感謝の意を表す。

調査標本: 3♀♀, 国頭村我地林道, 18. I. 1986; 1♂, 国頭村与那, 28. III. 1987, 松永齊大採集。

引用文献

- 岸井 尚, 1989, 徳之島で採集された興味深いコメツキムシ, 月刊むし, (217): 39-40.
OHIRA, H., 1968, The Elateridae of the Ryukyu Archipelago, V (Coleoptera), *Kontyû*, 36(2): 134-143.

(愛知県岡崎市, 大平仁夫)

中根猛彦博士を偲んで

高桑正敏

中学2年生の時にハナノミ科甲虫の存在を知った私は、翌年にキンオビハナノミとの衝撃的な出逢いに恵まれた。以来、チョウやカミキリムシにのめりこみながらも、ハナノミの採集を心がけた。しかし、図鑑を見てもなかなか種名がわかるものではない。大学生になってあるとき、ハナノミのいくつかを持って、当時国立科学博物館におられた中根先生をお訪ねしたことがある。先生はにこやかに応対してくださり、「ハナノミの分類は難しいですね」と前置きされてから、その場で「ちょっと違うところもあります……、ニセウスイロヒメハナノミでしょう」といった様子ですべてを同定してくださった。このときの同定結果を基に、Insect Magazine 誌上に「ハナノミ四種の記録」という短報を書いた。実は、高校の生物部誌に記した駄文を除けば、これが私の昆虫界へのデビュー作であった。この意味で、私にとって中根先生は、忘れられない恩師のお一人である。その中根先生が5月26日に突然に他界された。ご逝去に謹んで哀悼の意を捧げたい。

中根先生のハナノミへの業績はきわめて大きい。もともと大好きな分類群だったらしく、すでに20歳のときに「キノコに棲むハナノミ」を書かれているし、先生の2, 4, 7番目の記載論文はハナノミであった。以来、1960年までに、「昆虫学評論」などに単独あるいは中條道夫博士や故野村鎮氏と共著で、ハナノミに関する論文を多数発表されてきた。1957-1958年には、「新昆虫」誌上の「日本の甲虫」シリーズの中で、7回にわたってハナノミ科を詳しく解説され、ただでさえ分類が困難なうえ当時急激に新知見がもたらされたこの科の理解に大きい貢献をされた。もちろんハナノミ科ばかりでなく、カミキリムシ科をはじめ日本に産するほとんどの甲虫の分類群について多大な業績を残されたことは周知のとおりである。また、原色昆虫大図鑑の2巻(甲虫篇)の大部分の分類群を執筆されたが、その図版に使用された標本は小型個体でもみごとに展足されていた。標本はできるだけ美しく展足する、という私自身のスタンスは中根先生により培われたものである。

しかし、中根先生には「甲虫のあらゆる分類群に精通された偉大な分類学者」という評価がある一方で、国立科学博物館を去られて以降に歩んでこられた研究道は、側からはけって王道のようには見えなかった。——学会活動に寄与されることがまったくなかったようだし、加えて「甲虫ニュース」や「月刊むし」、「北九州の昆虫」誌上などに、中央で活躍されている研究者たちに対する直接・間接の批判記事をたびたび投稿されていたからである。私どもの博物館が新規オープンしてから2度ほど来館し

てくださったが、そこでも他の方を批判されるお話しが出て、私としては戸惑うばかりであった。

中根先生は、私にとってはいつでも温和な方であったし、親切で人懐こい感じを抱かせる方であった。それなのに、先生の書かれた文面や述べられた言葉には、先生とは思えないような批判が先にたつ。このギャップは何に起因しているのだろうか。かつて青木淳一博士は中根先生から、「ぼくは人と深く付き合うことを好まない。相手が親しくなればなるほど、遠ざけてしまう」といった内容の話を聞いたことがあるそうである。そこに、先生が孤高の精神を潔しとするとご自分では思っておられたこと、そしてそれゆえに誤解や不要な摩擦を生じてしまったこともあるだろう、と感じられてならない。

ご研究面でも、大図鑑以後は孤高の道を歩まれたように思えてしまう。ご自身が編集された「Fragmenta Coleopterologica」をはじめ、所属された大学・博物館の紀要・研究報告など、また地方同好会誌などに記載論文を多数投稿される一方で、日本昆虫学会や日本鞘翅学会、日本甲虫学会のような中央の学会誌に論文をほとんど投稿されなかったからである。しかも、その論文としての体裁には、かならずしも一般的ではないものもあった。『各人各様に書いた原稿がそのまま載るような雑誌が私には親しみがもてる』(中根, 1989, 北九州の昆虫, 36: 1)との考えをお持ちだったからこそ、査読者がいる、あるいは投稿規程が厳格な雑誌を忌避されたのかも知れない。しかし、それならばよりいっそう内容面に不備があってはならない、と私は思う。この意味で象徴的に苦言を呈するなら、遺稿とされた「スゲハムシの学名について」(中根, 1999, 昆虫と自然, 34(8): 45-46)の出版にあたっては、「昆虫と自然」編集部に十分な配慮が欲しかったと悔やまれる。

(神奈川県立生命の星・地球博物館)

中根猛彦先生と私

藤田 宏

中根猛彦先生と初めてお会いしたのは、私が中学生の頃だから、もう30年以上前のことになる。東京・上野の下町で育った私は、自然の少ない環境の中で虫採りに励む昆虫少年だったが、近所で一番自然の残されていた所は、不忍池と上野の山からなる上野公園で、ネットをかついでは飽きもせずに通いつづけた。その公園の奥に国立科学博物館があり、当時は毎年夏の終わりになると動植物の同定会が開催されていた。昆虫少年にとって、こんな耳よりの話はない。私は図鑑を見ても種名のわからなかった虫を持参して、博物館へ通った。中根猛彦先生や黒沢良彦先生、それに青木淳一先生もおられた頃であったが、昆虫少年にとって、図鑑でお名前を見たことがあるような人に直接お会いできて、虫の話ができることは夢のように光栄なことであった。

当然、足繁く通うようになり、顔を覚えていただくと、部屋にも遊びに来なさいと言われるようになり、大人の中に混じっていろいろな先生の部屋に入るようになった。そんな背のびをした環境で育ったせいか、早い頃から大人の世界は複雑だと感じる事が多くあった。中根先生は、親子ほどの年の差がある私にも大変親切にして下さり、いつもにこやかなお顔で、いろいろと甲虫のことを教えて下さった。

成人して、「月刊むし」の編集を担当するようになると、中根先生にはたびたび原稿をお願いして、ご苦労をおかけしてしまった。その中でも、毎年の年頭に特集している昆虫界の回顧記事ほど先生を悩ませてしまったものはないだろう。何度も「もう年だから、かんべんしてくれないか…」と言われたが、他の昆虫群とはスケールの大きさがちがう甲虫界のことを、世界的な視野でまとめることのできる方はきわめて少なく、秋も深まる頃になると、おそろおそろお願いしたことを想い出す。内心では大変なことをお願いして申し訳ない気持ちで一杯だったが、頼まれるとイヤとは言えない先生の暖かさに、何度救われたことかわからない。この回顧記事は先輩誌である「昆虫と自然」から始まったものだが、労が非常に多くして、オリジナルな論文ではないので、プロの学者の業績としては大きいプラスにはならないのかもしれない。しかし、これを指針やよりどころとしている同好者は非常に多いので、この欄を執筆して下さい歴代の方がたには、いつも心から感謝しているしだいである。

1985年には、友人の市川敏之氏から中根先生の退官記念論文集を作ってくれと頼まれた。とても私のような者がお引き受けすることではなかったが、当時中根先生の秘蔵子？だった市川氏に何度も頼まれ、ひきうけることにした。この折には、過去のさまざまなしがらみもあったと思うが、多くの先生方が快く原稿をお寄せ下さり、なんとか論文集を発行することができた。本作りにあたって、編集に絶大なご尽力をいただいた青木淳一先生や高桑正敏氏、国際文献印刷社との間にたって多大な便宜を計っていただいた上野俊一先生や笠原須磨生氏らのご協力がなければ、とても私にできる仕事ではなかったことは、いうまでもない。本ができた日は、中根先生と親しい人間が集まって打ち上げが行われたが、先生はいつになく相好をくずしておられ、私も少年時代からのご恩がえしが、すこしだけできつうれしかった。

その後も10数年は、ときどきお会いしたりお電話をしたりするお付き合いで、原稿をお願いしては先生を困らせるという状況だった。昨年は「月刊むし・ブックス」で、日本の昆虫研究の戦後50年史を各分野の方にまとめていただこうと企画し、甲虫を中根先生にお願いした。この単行本のご執筆が始

まり、先生の少年時代の回想から始まって、兵隊に召集されるあたりの頃まで筆が進んだところで、突然ご入院の話があった。お電話などのご様子もお元気であったし、この本を担当させていた谷角素彦君へあてた最後のお手紙にも、「ちょっと入院するけど、あい間をみて病院でも原稿を書くから…」と書かれていた。とても深刻な重病とはいえ、されるといった感じではなかったのに、訃報はなにかのまちがいとしか思えなかった。

昆虫少年だった私も、今は中年となり、最近になって昔からご指導をいただいていた方がたの悲報が相次ぐようになってしまった。中根先生の独得のお声も、もう聞くことはできないし、新しい原稿を見ることもできない。人間の定めとはいえ、悲しいかぎりである。謹んでご冥福をお祈りするとともに、私も何か1つでも甲虫でよい仕事をして、来世で先生にご報告ができるように努力したい。

(東京都台東区)

中根猛彦氏の逝去のこと

佐藤正孝

1999年5月26日、本学会名誉会員の中根猛彦博士が亡くなられたとの報が入った。その折に立場上連絡調整を計ったところ、「虫屋さんは葬儀に出て欲しくない」という意を込めた遺族からの申し入れがあったと聞き及び、式場もわからないままに当学会としては一応自宅宛てに弔電を打つことしかできなかった。名誉会員であるからには、礼にかなった処遇をするのが本意であったが、それとかなわないままであったという事情は、とくに述べておく必要があるだろう。そういえば、名誉会員推薦に当たっても、論議があったことを思い出さずにはいられない。われわれは、氏のそれまでの業績について名誉会員に推薦したのであったが、その受理挨拶のとき、「馬場金太郎さんのように寄付をしていないので、名誉会員になれるとは思ってもみなかった」との言には、われわれの学会をどう考えているのかと、正直いって驚いてしまった。馬場博士から多額のご寄付をいただいたことは確かに事実であるが、それは日本鞘翅学会再建の非常時に、こちらからとくにお願いしたことであるし、それ以外にも馬場博士が、ご自身の採集された膨大な標本を、惜しげもなくそれぞれの専門家に提供されてきたことは、誰もが知るところである。それら計り知れない貢献に対して、学会としては名誉会員をもってわずかで報いさせていただいたことを銘記しておきたい。

冒頭からこんな書き出しになってしまったのは、なぜ私が追悼文を書かなければならないのかという気持ちと、一方では事実関係を明確にしたうえで、研究者としての氏の業績を評価すべきだという思いとが交錯しているからであろうか。いろいろな立場上、筆を取らざるを得ない事情は理解しているつも

りであるが、氏との関係は生前に決してよくなかったといった方がよい。とくに晩年には、私ばかりでなく多くの方がたが筆による被害を受けたといっても過言ではない。なかでも黒澤良彦博士、上野俊一博士とは国立科学博物館という同じ場所に勤め、一時期、彼が黒澤博士の上司であったことも関係している。

黒澤博士については、博物館での各種の対応は立場や考え方の違いによる問題もあったのかと思われるが、若き日の出来事までも引き合いに出しての批判は理解に苦しむ。上野博士については、とくに京都時代からの思い入れがあったのか、標本をもらったところカツオブシムシがついていて自分の標本も被害を受けてしまったとか、千葉県立中央博物館の昆虫関係の人員が科博より多いのはけしからんといつて邪魔をしたとか、いくつかの難癖をつけられた。しかし、千葉県立中央博物館の人事などについては、上野博士がどれだけ陰で努力されて昆虫学関係者を増やそうとされたか、私自身も多少の関与をしたのでよく承知している。なぜこのようにいわれなきことを筆にされたか理解に苦しむ。なにごとにも自分の思いどおりにならないと気の済まない気性だったのかと疑いたくもなる。それまで、どうせ誇大妄想狂のたわごとさ、と笑い捨ててこられた上野博士も、このときばかりは激怒されて、全文の取消しと根も葉もない記事を無定見に取りあげた掲載誌上での謝罪を要求され、もしそれが容れられなければ、掲載誌の不見識な編集者とともに、名誉毀損罪で告訴することも考えておられた、と聞き及んでいる。多くの仕事をされたにもかかわらず、学会の役員にほとんど選ばれなかったのは、そのような性格や行為の反映であったのかもしれない。

東京大学理学部を卒業されて名古屋大学理学部へ赴任され、招かれて西京大学農学部(現京都府立大学)へ移られたが、そこでも怪文書「レタカルチョ」なるものを出し、招いてくれた教授を非難されている。そして科博でもさんざん不満をもらされ、鹿児島大学理学部へ、停年で宮崎産業大学への転職は別

として何度も職場を変わっておられる。その間、優秀な弟子を育成することもできたはずなのに、との思いが強い。

いっぽう、中根氏の甲虫界に対する貢献の大きかったことを否定するものではない。私自身も氏の西京大学時代には何度もご指導をいただいたことがあるし、故大林一夫さんと親しかったこともあって、私の真の恩師と仰ぐ大林さんを訪ねられた折などよくお目にかかったものである。それは北隆館の原色昆虫大図鑑甲虫篇執筆の折でもあった。この図鑑(1963)が出版され、氏は個人雑誌「Fragmenta Coleopterologica」(1961)を創刊され、図鑑の年号に合わせるような形で数年遅れで多くの新種を記載された。顧みるに、その頃を境に筆禍が多くなったような気がする。

第二次世界大戦敗戦の混乱から立ち直りゆく中で、氏の活躍は賞賛すべきものがある。文献など資料の乏しい中で次つぎと新しい知見を公表され、戦後の甲虫界を再建される一翼を担われた。のちに氏の博士論文となったオサムシ類の検討、さらに食糞コガネムシ類、カミキリムシ類、その他小さい群など広範に研究を公表された業績は大きい。それがなぜか、大図鑑を境にいろいろな方との摩擦が大きくなってきたようである。それも「北九州の昆虫」誌に、雑甲虫と称する分野の一連の記載を書かれる中で、前文に科学論文としてまったく不必要なことがらがめめんと綴られるようになった。このあたりは、レフェリー制を嫌うというより、自分の論文に他の人が少しでも手を入れることを嫌う気持ちが強く、上記の前文中でも触れられているように、校閲制度のない雑誌ばかりに書くことが問題を大きくしているようである。論文そのものの質も、この頃から急速に悪くなった。

中根博士の逝去を悼む心には変わらないが、生前の活躍の中で前半と後半とがあまりにも違いすぎたことを惜しみ、事実は事実として筆を走らせた。なにはともあれ、霊だけは安かれと筆を置く。

(前会長:名古屋女子大学)

○ヤマトナガヒラタムシの本州の記録

ヤマトナガヒラタムシ *Tenomerga yamato* MIYATAKE, 1985 は愛媛県高縄山産の標本をホロタイプに指定して記載されたもので、パラタイプに長崎県多良岳、大分県祖母山産のものがある。分布は四国、九州ということだが、筆者は神奈川県で本種を採集しているので、ここに報告したい。おそらく、本州から初めての記録かと思われる。

♂, 神奈川県松田町虫田, 7. VII. 1997. 筆者採集すでに神奈川県ではヒメナガヒラタムシ *T. japonica* (TAMANUKI) 及びナガヒラタムシ *T. mucida* (CHEVROLAT) も報告されているので、本州産3種すべてが生息していることがわかった。おそらく、関東以南ではこれら3種が分布しているものと思わ

れる。なお、3種の区別点を検索表で示すと次のとおりとなる。

- 1(2) 眼を含む頭の幅は前胸背板前角間より明らかに狭い。上翅は黒色。……ヤマトナガヒラタムシ
- 2(1) 眼を含む頭の幅は前胸背板前角間より同じかやや広い。
- 3(4) 上翅の翅端部を除き、暗褐色の細かい鱗毛に覆われる。……ナガヒラタムシ
- 4(3) 上翅は暗褐色と灰褐色の鱗毛を装い、まだら模様状を呈する。……ヒメナガヒラタムシ

引用文献

- MIYATAKE, M., 1985. *Trans. Shikoku ent. Soc.*, 17: 21-26.
(神奈川県小田原市, 平野彦彦)

○静岡県におけるアカツツホソミツギリゾウムシの記録

アカツツホソミツギリゾウムシ *Callipareius* (*Callipareius*) *japonicus* は NAKANE (1963) により三重県平倉産の標本に基づき、*Asapheptum* 属の1種として記載された。その後 MORIMOTO (1976) は本種を *Callipareius* 属に移すとともに、福岡県若杉山と徳之島からの追加記録を報告した。稀種であり、それ以後の記録はほとんどないようである。筆者は静岡県で採集された本種の標本を所持しているので報告する。

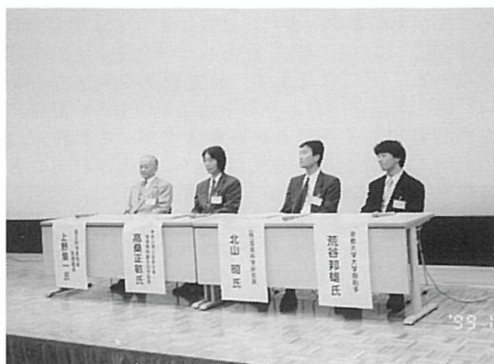
1頭、静岡県天城湯ヶ島町天城山御幸林道、16.VIII.1999、島田孝採集。

貴重な標本を恵与下さった東京農業大学昆虫学研究室の島田孝氏にお礼申し上げます。

(東京農大、吉武 啓)

◇大会報告◇

日本鞘翅学会第12回大会は1999年11月13日(土)～14日(日)の2日間、愛知県の豊橋市自然史博物館で行われた。



事例報告したパネリスト



盛り上がったパネルディスカッション

1日目は11時半から総会が開催された。午後12時半から11編の口頭発表があり、内容もバラエティに富んだ興味深い話題が提供された。またイントロホールでは7編のポスター発表があり、日頃の

研究成果が美しい写真とともに展示され、人々の目をうばった。

夜はホテル日航豊橋の広々としたホールで、盛大な懇親会が開催され、110名ほどの会員が料理とお酒を堪能し、虫談に花を咲かせた。

2日目は9時20分から「甲虫の絶滅と衰退—その背景としての環境問題」と題してシンポジウムが行われた。まず佐藤正孝氏の基調講演に始まり、上野俊一、高桑正敏、北山 昭、荒谷邦雄各氏の事例報告があり、パネルディスカッションに入った。種々の問題が出て盛り上がり、定刻の12時を30分もオーバーして終了した。午後からはポスター発表の説明があり、別室では同定会が開かれた。同定会の中には入れないほどの混雑で、急遽2部屋に分けた。時間がなく、満足できなかった人もあったようである。

14時からは大平仁夫氏の記念講演「コメツキムシってどんな甲虫(むし)?」があり、成虫ばかりではなく、幼虫にも言及され、興味深いお話であった。

最後はゴミムシ、ハネカクシ、カミキリムシ、ゾウムシ、雑甲虫、DNAの分科会が行われ、5時前に終了した。こうして2日間の大会は無事成功裡に閉幕した。

今回は一般の人も含めて150人を超えた方々が参加した。これらは豊橋市と博物館のご援助と多くの方々のご協力の賜と厚く御礼申し上げます。

次回は札幌の北大で7月22日(土)～23日(日)に開催する。採集会も24日～25日に実施するので、多くの方々の参加をお願いしたい。

(企画大会担当、平野幸彦)

◇日本鞘翅学会第13回大会のお知らせ◇

下記の予定で13回大会が開催されます。大会後には、大会採集会が予定されています。

【日時】平成12年7月22日(土)～23日(日)

【場所】北海道大学農学部

【主な内容】

○一般講演(口頭発表、ポスター発表)

○記念講演: 西島浩(北海道昆虫自然史研究所)

○シンポジウム「北に生きる甲虫たち」

○その他、標本同定会、分科会、懇親会が開かれます。プログラム(22日は9:30から受付開始、23日終了は16:30)は後日案内予定。

○宿泊や航空機等の予約は、北海道大学生協旅行部へ参加者が直接申し込んでいただくことになります。連絡先等は後日ご案内しますが、観光シーズンのため早めのご予約をお願いいたします。

○講演申し込み締め切り: 平成12年5月10日。後日、申し込み用紙及び詳細を送付予定。

●日本鞘翅学会第13回大会採集会

【日時】平成12年7月24日(月)～25日(火)

【場所】十勝三股

《第13回日本鞘翅学会大会事務局》

〒060-8589 札幌市北区北9条西9丁目 北海道大学農学部昆虫体系学講座内

◇採集例会報告◇

1999年度の採集例会は前回に引き続き、日本甲虫学会との合同で、7月10日、11日に奈良県大峰山系和佐又山ヒュッテにおいて開催された。



日本鞘翅学会22名、日本甲虫学会21名の合計43名の参加という盛況であった。

恒例により、夕食後に懇親会が開催され、両学会はほぼ同数の参加者の自己紹介と情報交流の一大イベントが行われた。2年続けて参加された甲虫学会の方々と、昨年に増して親しく話せるようになったのは有意義なことであった。ドイツからメダカハネカクシのDr. Volker Puthz夫妻が参加され、会場で英会話が飛び交ったのも今年の特徴であった。また関西におけるメクラチビゴミ軍団の迫力を目前に体験できたのは大きな刺激であった。

懇親会の後はナイターに行く人と懇親会PART2に居残る人に分かれ、和佐又の夜は、充実したひと時のうちに豊富なアルコールとともにあっという間に過ぎていった。翌朝ヒュッテの前の草原をバックに記念撮影して自由行動となった。



奈良県和佐又山採集会

前回にくらべ2週間時期をずらせたが、今回は虫の発生が早く、逆に今回は遅れたのでずらせた効果があらわれず、花は端境期にあたってしまった。

日本甲虫学会と、2年連続して合同開催を行ったが、今回の採集例会も、日本甲虫学会との合同で、

7月15日、16日に同じ場所で開催する予定である。

(神奈川県横浜市、大木 裕)

◇日本学術会議の学術研究団体登録◇

日本鞘翅学会の機関誌“Elytra”は、日本学術会議の審査に基づき、1998年9月に郵政省郵務局長から学術刊行物としての指定を受けています。これに引き続き、本学会が日本学術会議の登録学術研究団体となるのに必要な諸条件が整い、1999年4月に懸案であった登録申請を行いました。その結果、日本学術会議会員推薦管理会より通知があり、日本学術会議法第18条第3項に基づき、本学会が第18期日本学術会議会員の選出に係わる学術研究団体として同年9月14日付けで登録されました。

日本学術会議は、「科学が文化国家の基礎である」という確信に立ち、我が国の内外に対する代表機関として、科学の向上発達を図り、行政、産業および国民生活に科学を反映浸透させる」ことを目的とし、内閣総理大臣の所轄の下に置かれた特別の機関で、210人の会員により組織されています。登録学術研究団体となることによって、会員の候補者を選定し、または推薦人を指名して日本学術会議に届け出ることが出来ます。また、これによって本学会の原著論文誌“Elytra”は、「歴とした学会誌」として認められたこととなります。研究機関や大学などでは、研究業績が内容よりも学会誌そのものの評価に左右されてしまうことがあります。これからはElytraに掲載される論文が正しく評価されることとなります。このように、日本鞘翅学会は、名実ともに日本、さらにはアジアを代表する学術団体として、評価の基盤を得たこととなります。

今後とも会員各位の、本学会への御協力を賜りますようお願い申し上げます。

(会長 大林延夫)

甲虫ニュース 第127・128号

発行日 2000年2月29日

発行者 大林延夫

編集者 妹尾俊男

発行所 日本鞘翅学会 〒169-0073東京都新宿区百人町3-23-1 国立科学博物館分館動物研究部昆虫第二研究室 ☎ 03-3364-2311

印刷所 (株)国際文献印刷社

昆虫学研究器具は「志賀昆虫」へ

日本ではじめて出来たステンレス製有頭昆虫針00,0,1,2,3,4,5,6号、有頭ダブル針も出来ました。その他、採集、製作器具一切豊富に取り揃えております。

〒150-0002 東京都渋谷区渋谷1丁目7-6

振替 00130-4-21129

電話 (03) 3409-6401 (ムシは一番)

FAX (03) 3409-6160

(カタログ贈呈) (株)志賀昆虫普及社